

複数の仲間と創業して数年が経過。浮き沈みはあるものの、倒産の危機に直面しているわけではない。日々、それなりに忙しい。ただし、将来を考えるとほんやりとしている。こんな状態にあるベンチャー企業は少なくない。

ベンチャー企業の原動力は「ビジョン」だ。しかし、時間の経過と共に、そのビジョンがすずけてくる。いつしか、ビジョンは額の中のお題目になってしまっている。気づいてみたら、幹部で話しているのは日々

## V B経営 虎の巻

### 倦怠期を防ぐ

の売り上げ、利益が中心。から「何かを成し遂げたい」「何をすべきか」について話し合っている。話しているうちに、「何の」とただの零細企業になって「ためか」という本質的な議論がない。

この状態を放置すると「倦怠（けんたい）期」に入り、創業メンバーの離職、外部から迎え入れてはどう

### 第三者迎え入れ緊張感を

分業につながりかねない。長らく放置してはいけない。時間が経過すればするほど解決に時間を要することになる。ベンチャー企業

論家のような方はやめたほうがいい。一緒に課題に向き合ってもらえる時間と意欲がある人がいい。

「第三者」の役割は全員の満足の総和を最大化すること。誰か一人の満足のた

「第三者」として土日、深夜の方をあらかじめ見かける。その中で、「人の話を聞け

「第三者」として土日、深夜の方をあらかじめ見かける。その中で、「人の話を聞け

「第三者」として土日、深夜の方をあらかじめ見かける。その中で、「人の話を聞け



1985年上智大文卒。マ  
ーサー・ヒューマン・リソース  
・コンサルティング（現マーサ  
ー・ジャパン）社長などを経て、  
インディゴブルー社長 柴田 励司氏